

第3章 パネル調査結果に基づく3年間の経年比較分析

3-1 3年間連続回答者と2年目若しくは3年目に回答がなかった回答者の属性差異の分析

パネル調査で、3年間連続して回答のあった回答者と、2年目若しくは3年目に回答がなかった回答者との属性に差異がないか分析を行った。その結果、基本属性や被害内容、被害状況、回復状況等から、両者が同じ属性を持つとは言えないことが明らかになった。

【要旨】

「3年間回答」した層と比較して、「2年目若しくは3年目の回答なし」の層には、年齢が低く、定期的な仕事をしている（会社員、公務員、自営業）人が多い。また、世帯人数が少ない、世帯年収が少ないなどの特性がある。すなわち、比較的若年の正規従業員層であり、核家族ないしは独居世帯等の家族構成である比率が高い。一般的にこれらの人は、時間的理由等から、アンケート調査への協力度が低い傾向がある。

3年間回答層も2年目若しくは3年目の回答なし層も、1か月以上のけがを負った人の割合が同程度で、負傷の程度からみる被害の大きさに差はない。しかし、後者では、1か月以上のけがの場合その対象が被害者本人である割合と、1か月未満のけがの場合、けががなかったり、その対象が被害者本人でなかったりする割合が比較的高い。すなわち、2年目若しくは3年目の回答なし層は、被害によるけがの影響が非常に大きい、若しくは非常に小さいケースが多いといえる。なお、サンプル数が少なく参考値ではあるが、2年目若しくは3年目の回答なし層は、現在も治療中であつたり、後遺障害等級認定がなされた後遺障害があるとする人が比較的多く、ここからも、被害の内容が深刻であることがうかがえる。さらに、2年目若しくは3年目の回答なし層は被害に遭ってからの経過年数が短いため、事件の記憶が生々しいことも想像される。総じて、2年目若しくは3年目の回答なし層においては、3年間回答層と比べ、比較的最近に大きな被害を受けているという特徴があるといえる。

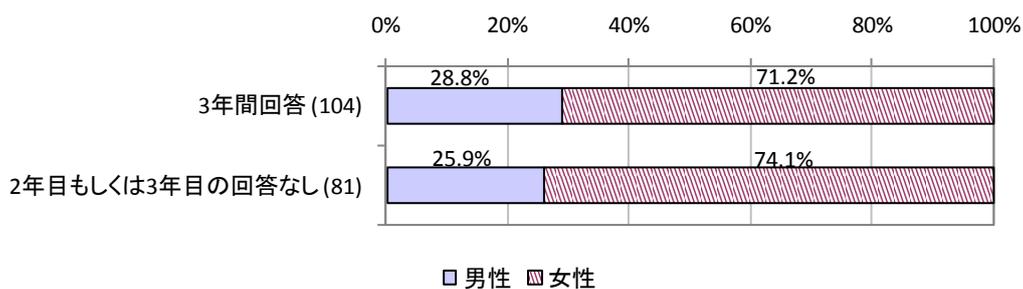
また、3年間回答層と比較して、2年目若しくは3年目の回答なし層においては、事件と関連した健康上・精神上の問題を抱えている割合が多い。また、2年目若しくは3年目の回答なし層では、K6得点が高い、日常生活に支障をきたす日数が多いという特徴があり、全体的には被害の影響に苦しんでいる人が多いことがうかがえる。被害からの回復状況の自己評価（主観的回復度）としては、3年間回答層より「0～2割回復」とする人と「9～10割回復」とする人が多く、前述の、被害内容の特性（被害によるけがの影響が非常に大きい、若しくは非常に小さいケースが多い）と整合している。

総じて、2年目若しくは3年目の回答なし層では、比較的、被害から受けた身体的・精神的影響に未ださいなまれている回答者が多いといえる。

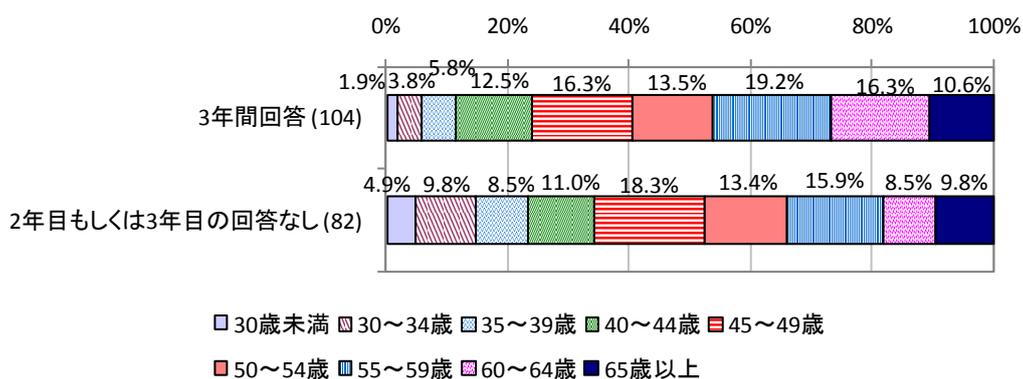
3-1-1 基本属性

「3年間回答」した層と比較して、「2年目若しくは3年目の回答なし」の層においては、年齢層が若い（図表3-2）、仕事をしている比率が高い（図表3-3）、世帯人数が少ない（図表3-4）、世帯年収が少ない（図表3-5）という特徴がある。

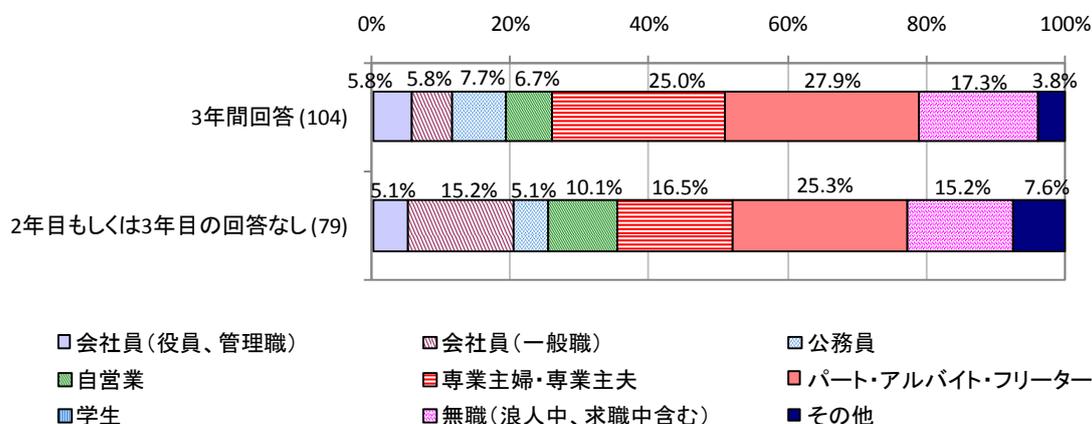
図表 3-1 回答状況別、性別



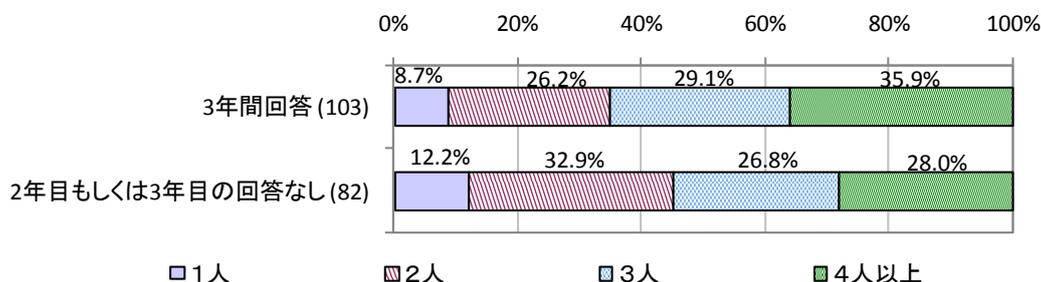
図表 3-2 回答状況別、年齢（平成19年度調査時点）



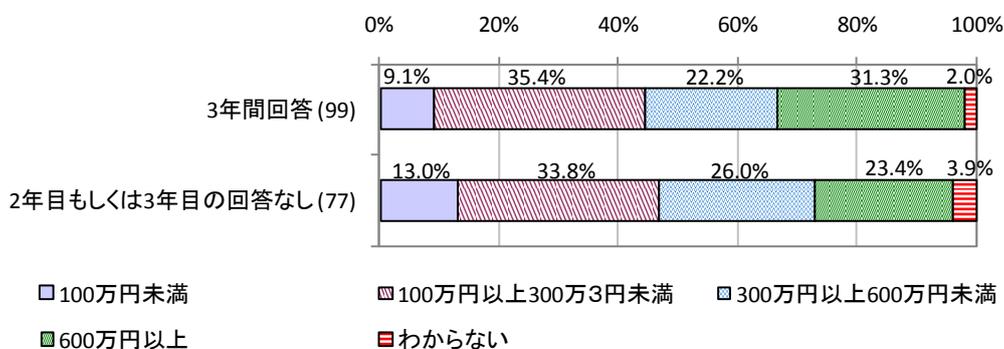
図表 3-3 回答状況別、職業（平成19年度調査時点）



図表 3-4 回答状況別、同居家族人数（平成19年度調査時点）



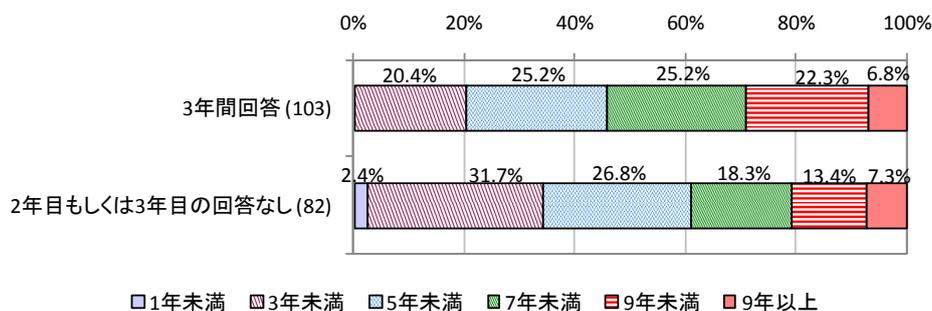
図表 3-5 回答状況別、世帯年収（平成19年度調査時点）



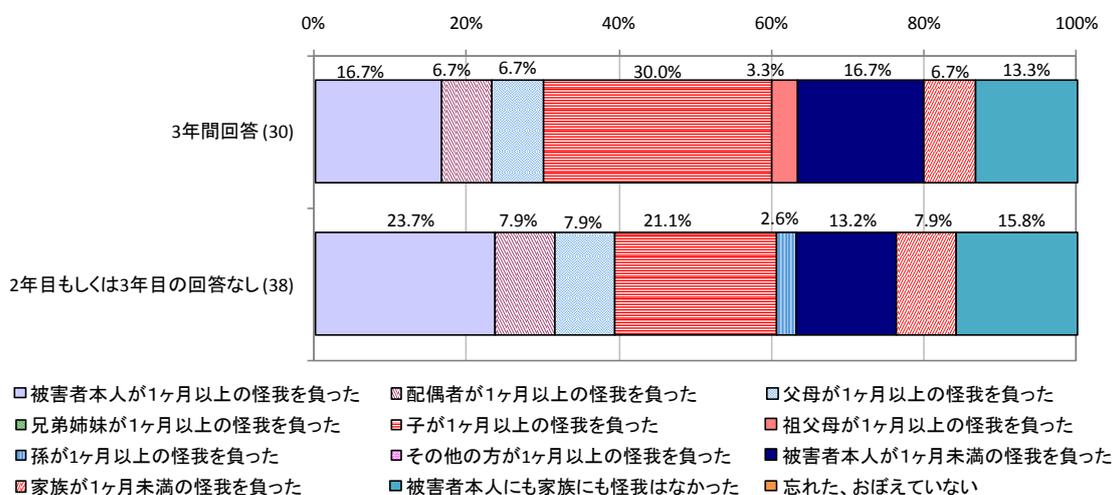
3-1-2 被害の内容

3年間回答層と比較して、2年目若しくは3年目の回答なし層においては、被害に遭ってからの経過年数が短い（図表 3-6）。両者とも1か月以上のけがを負った比率は相違ないが、2年目若しくは3年目の回答なし層では比較的、自身がけがを負った人が多く、家族がけがを負った割合は小さい（図表 3-7）。また、サンプル数が少なく参考値ではあるが、2年目若しくは3年目の回答なし層では現在も治療中（図表 3-8）、後遺障害等級認定がなされた後遺障害がある（図表 3-9）人が比較的多い。

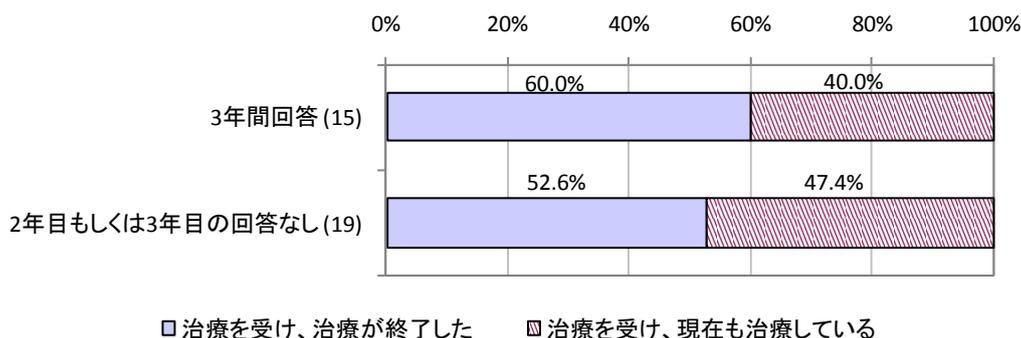
図表 3-6 回答状況別、被害に遭ってからの経過年数（平成19年度調査時点）



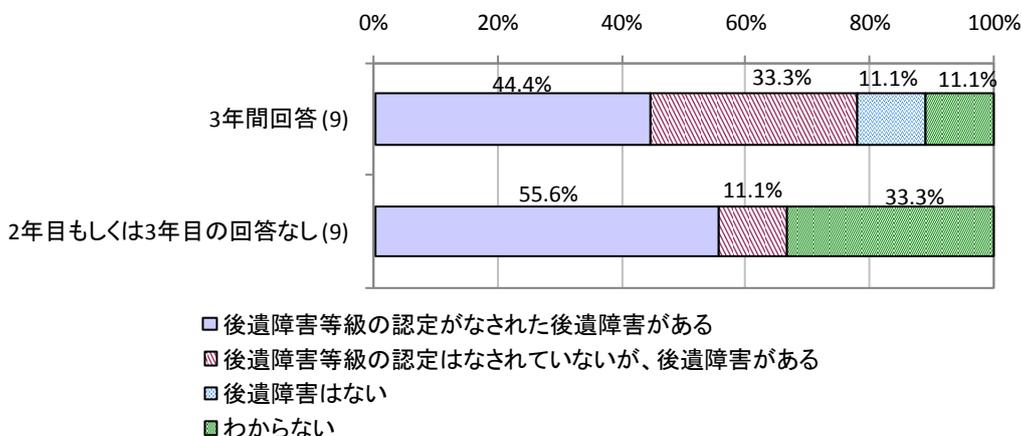
図表 3-7 回答状況別、事件によって1か月以上のけがを負ったか



図表 3-8 回答状況別、治療状況（平成19年度調査時点）



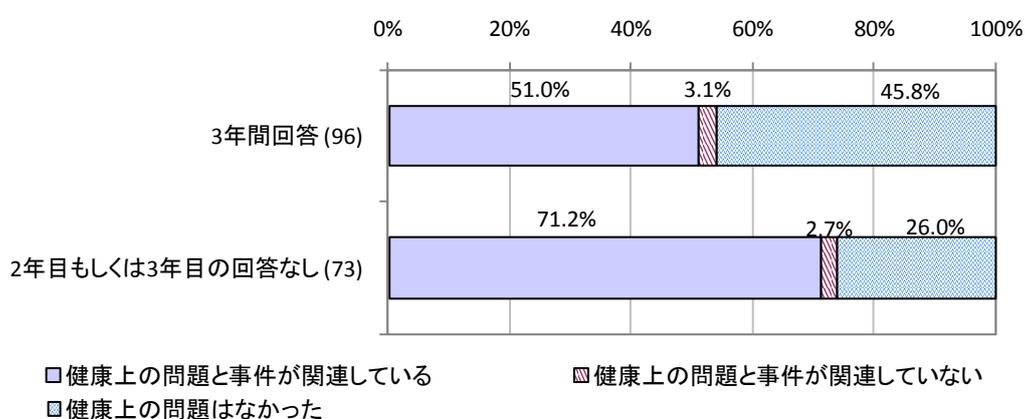
図表 3-9 回答状況別、けがによる後遺症（平成19年度調査時点）



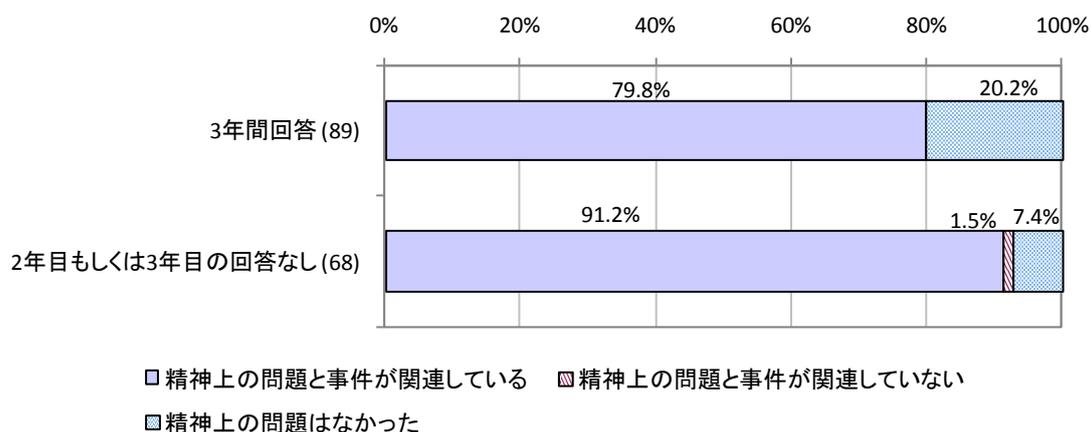
3-1-3 被害状況、回復状況

3年間回答層と比較して、2年目若しくは3年目の回答なし層では、事件と関連した健康上・精神上の問題を抱えている層が多い（図表3-10、図表3-11）。また、後者では、K6得点が高い回答者が多く（図表3-12）、日常生活に支障をきたす日数が多い（図表3-13）。被害からの回復状況の自己評価（主観的回復度）としては、「0～2割回復」との回答が多い一方で、3年間回答層と比較して「9～10割回復」も多くなっており、二極化が見られる（図表3-14）。

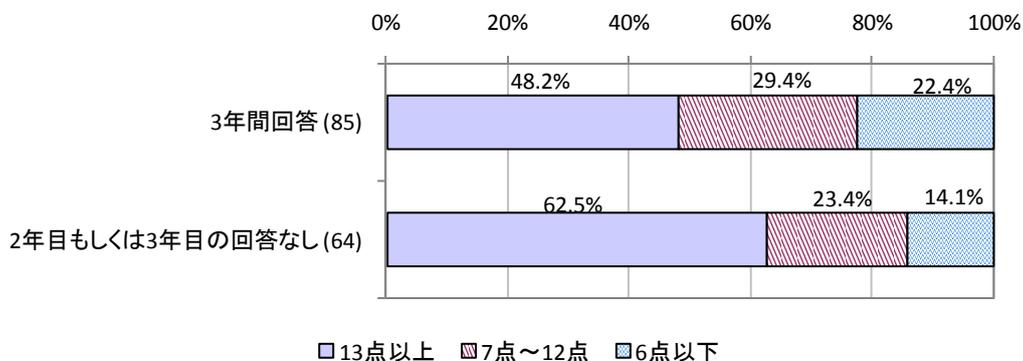
図表 3-10 回答状況別、事件と関連した健康上の問題の有無（平成19年度調査時点）



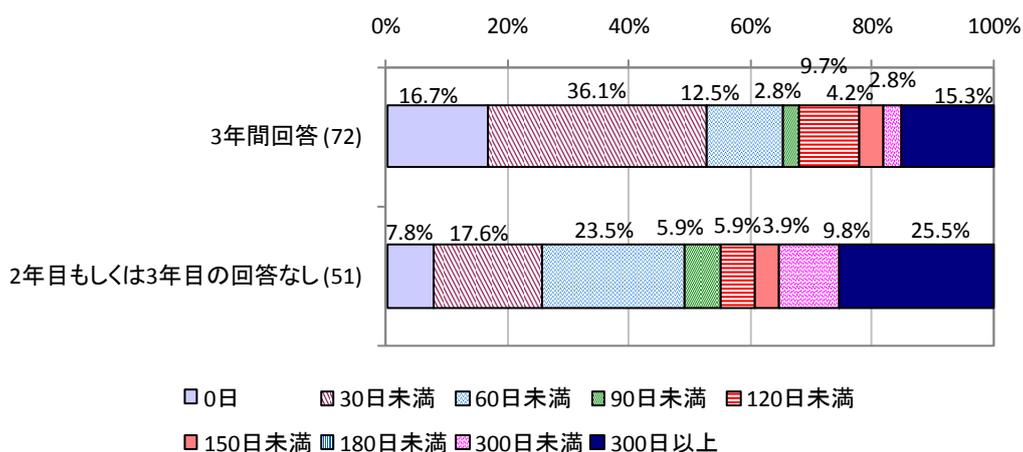
図表 3-11 回答状況別、事件と関連した精神上的問題の有無（平成19年度調査時点）



図表 3-12 回答状況別、K6 合計値（平成19年度調査時点）



図表 3-13 回答状況別、この一年で事件に関連して仕事や日常生活が行えなくなった日数（平成19年度調査時点）



図表 3-14 回答状況別、事件被害からの回復度合い（平成19年度調査時点）

